

黒羽芭蕉の館だより ⑱

奥の細道シリーズ切手(5)

「広報おおたわら」8月1日号の本欄に続き、今回は「奥の細道シリーズ」切手シート(全20枚、昭和63年発行)の内、第8集〜第10集に記される芭蕉の6句を紹介いたします。

第8集は俱利伽羅〜金沢で、1枚目の句はへわせの香や分入右は有磯海です。句意は、かぐわしい早稲のかわりの中を分け入って進めば、遙か右手に有磯海が広がっていることだろう、となります。季語は「わせ」で、秋の句です。

2枚目はへあかく〜と日は難面も秋の風です。句意は、残暑きびしく、太陽は赤々と照りつけるが、さすがに風には秋らしさが感じられることである、となります(季語は「秋の風」で秋)。

第9集は那谷〜敦賀で、1枚目はへ石山の石より白し秋の風です。季語は同じく「秋の風」で、句意は、この那谷寺の建っている石の山に吹ぎつける秋風は、石の肌より白く冷徹な感じがする、となります。

2枚目はへ月清し遊行のもてる砂の上で、句意は、歴代の遊行上人が持ち運んだ神前の砂の上を、月光が

清らかに照らしている、となります(季語は「月」で秋)。

第10集は種の浜〜大垣で、1枚目はへさびしさやすまにかちたる浜の秋です。句意は、夕暮れ時の何と寂しいことか、種の浜の秋の情趣はあの須磨にも勝るものだ、となります(季語は「秋」)。

2枚目はへ蛤のふたみに別行秋で、句意は、離れがたい蛤の蓋と身が別れるように、私もなごりを惜しみつつ皆と別れ、行く秋にも別れを告げ、一見が浦へとまた新たな旅に発する時が来た、となります(季語は「行秋」)。「おくのほそ道」最後の句です。



奥の細道シリーズ切手 第10集 大垣

問い合わせ

黒羽芭蕉の館

TEL (54) 4151

彫刻

周遊 ④

市内で作られた作品とその作者

このコーナーは、「那須野が原国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介いたします。



この作品は、大田原市役所南別館の向かいにある植込みの中に設置されています。

丸い形の台座に、2本の枝豆がサヤごと平行に突き刺さったような形をした彫刻です。

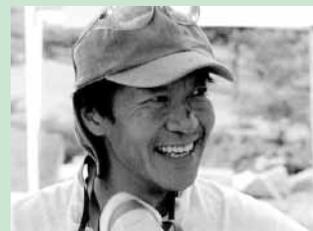
作者は人と自然の有り様に強い関心をもっているように見受けられます。

図録には「古代から人は自然からの寓意と啓示に満ちた神話をつくり、それらは無文字の伝承として伝えられてきました」という一文からはじまり、「彫刻は人と自然の原初的な関わり方の在り方を(中略)祭

雲と地表の間

つづみ かずひこ 堤 一彦 日本 2003年

祀や信仰の中に棲む常世の木としてイメージしています」と続きます。作者は、彫刻のことを、死後の世界に根付いているような大昔の人と自然との関わり方を、神話として語り継ぐかのように、現代に表現する方法だと考えているのかも知れません。また、この彫刻を制作する行為が、悟りへと続くことを願っているようです。



堤 一彦 氏

作者の堤一彦氏は静岡県生まれ。二紀会に所属をし、1983年に金沢美術工芸大学を卒業。愛知県のシンポジウムに参加をし、1999年には二紀展で同人優賞、2002年には会員優賞を受賞しています。

設置場所案内図(★印)



問い合わせ

文化振興課文化振興係 TEL (23) 8718